

平成22年度 共同機構研修会 第5回

平成22年10月13日(水)

京都市保育士会共催

子育て支援～これまでとこれから～

講師 穴戸 健夫 大阪健康福祉短期大学特任教授

日本保育学会理事，日本幼児教育史学会会長，保育研究所理事長。著書に、「実践の質を高める保育計画」「実践の目で読み解く新保育所保育指針」他。

子育て支援について，保育所保育指針では，入所児だけではなく，地域における子育て支援の推進が挙げられています。幼稚園教育要領の方でも地域の子どもたちも含めて，保護者同士の交流の機会を積極的に提供する等といった活動の推進が挙げられています。

そして，そのことだけではなく，児童虐待も非常に多くなってきている中で，何故そういうことが起るのか，地域の支援活動でその問題が解決できるものなのかということも考えていく必要があるのではないかと思います。

子育て支援というと相談活動などと捉えがちになりますが，虐待の原因が“社会的な孤立”や経済的な困難，つまり“貧困”ということが取り上げられている今，私は幼稚園，保育所に預けることそのものが子育て支援ではないかと思っています。

<参加者のアンケートより>

「子育て支援について幅広い視点から話をしていただき，勉強になりました」「子育て支援がイライラを解消し，家庭の子育ても楽しいと思ってもらえるような事業でありたいと思いました」など子育て支援のあり方を考える学びに繋がったという感想が多くありました。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています

平成22年度 共同機構研修会 第6回

平成22年11月4日(木)

京都市私立幼稚園協会共催

保育所・幼稚園と小学校との連携の充実

講師 鈴木 正敏 兵庫県教育大学大学院准教授

専門分野は幼児教育。幼稚園における保育や小・中学校における教育について，比較文化の視点を持ちながら，その本質について研究中。著書に小田豊・神長美津子（編）「平成20年改訂 幼稚園教育要領の解説」（共著），「ビデオ再生刺激法を用いた幼稚園・小学校教師の発達観の比較研究」（共著），「乳幼児教育学研究」他

保育所・幼稚園と小学校との連携は，「子どもの学びを保障するため」という視点を持ち，互いが「保育・教育の中で何を大事にしているのか」を話し合うことが大切です。

保育所・幼稚園では，子どもの好きなことや得意なことを生かした保育を展開し，子どもたちが「自分に自信をもつ」「友達と仲良くする」「知ることって楽しいと思う」ことが獲得できるようにしていくことで，小学校につなげていくことができると思います。小学校には要録に加え，日々の子どもの育ちや学びの経緯を具体的に伝えていけるとよいですね。

<参加者のアンケートより>

「最初にグループになって話し合ったことがとてもよかったと思います」「具体的に現場の話を変えていただいたので，わかりやすく，自分たちのしていることの意味を改めて感じました」「“その子の好きなこと”を取り上げ，柔軟にプログラムを組み立てていける保育を大切にしていきたいと思いました」との感想がありました。

この講演会のビデオ・DVDを貸出しています

こどもみらい館研究プロジェクト

保育園(所)・幼稚園，私立・市立・国立の垣根を越えた「共同機構」による研究事業として、保育内容の更なる充実・発展や子育て支援を目指し、平成22年5月に「保育園(所)及び幼稚園並びに小学校との連携」に関する研究プロジェクトが、平成22年12月には「保育園(所)・幼稚園における子育て支援」に関する研究プロジェクトが発足しました。

I. 保幼小連携研究プロジェクト

1 目的

保育園(所)保育士・幼稚園教諭・小学校教諭が共にお互いの保育・教育を理解し合い、子どもの育ちの連続性を見通した保育・教育について考察する。

2 研究メンバー

地域で子どもの育ちを見守るという観点から、近隣、できれば同一小学校校区から保育園(所)・幼稚園のペアで共同研究園を設定し、共同研究園の近隣(同一)小学校区からの教諭の参画を依頼しました。

3 全市で2ペア実施しています。 各グループの取組

京都市御池保育所(民営保育園)，京都市立中京もえぎ幼稚園(市立幼稚園)，京都市立御所南小学校

1 研究主題と設定理由

研究主題(仮題)：主体性を育み、つなぐために ～「知る」から「理解」へともに進める連携を通して～

設定理由：

御所南小学校と中京もえぎ幼稚園は、中京区の複数の学校、園の統合を経て平成7年および12年度に創立、御池保育所は平成18年度に教育や福祉の複合施設である御池創生館の一角に誕生した。小学校と幼稚園は、隣接する公立の施設として交流活動を始めて久しいが、各々の時間的な制約もあり、交流のめあてや事後についての協議の確保、互恵性のある内容の工夫等、連携に向けての課題がある。また、これまで保育所を交えた交流の機会はなかった。

しかし、近年の子どもの育ちや社会の変化をみると、同一地域で発達を連続する幼児や児童が通う施設同士としての保幼小三者が、互いの子どもの発達や課題、保育や教育のあり方や考えを知り理解を進める中で、めざす子ども像を共有し、発達や学びをつなぐという側面からそれぞれの立場で大切にすべきことを明らかにすることが、必須であると考えた。

この度、学習指導要領等の改定の方向性に、引き続き「生きる力」の育成が示されたが、本ブロックでも生きる力の基盤となる「自分で考えて行動する」「主体的に生活や遊び、学習を進める」力の育成を共に願っていることがわかった。そこで本研究では「主体性」を窓口、参観、交流等の場面やエピソードを通して幼児や児童の姿を共有しその発達を学ぶと共に、保幼小における主体性のとらえ方、保育や指導のあり方の共通点や違いを探りながら三者で改めて「主体性」を見直し、それを育むための段階的な指導や援助、環境、連携のあり方を考えたい。

2 研究方法

- ① 保育士、教師間交流を通して(実態、課題、めざす子ども像、研究主題等についての協議)
- ② 施設見学、保育、授業、行事の参観および保育参観後の研究協議を通して
- ③ 保幼の子どものエピソード研修を通して
- ④ 幼児・児童の交流活動と事前・事後研修を通して

3 考察

○ まだまだ出発地点ではあるが、同じ乳幼児期の子どもの預かる保育所と幼稚園の中身を徐々に知りつつある。身近にありながらこれまで全く交流することのなかった保幼が継続して交流する機会をもつことで、互いの施設、子どもの姿、保育理念、保育のあり方を知り合うスタート地点に立ち、ともに子どもの実態やめざす姿について語り合い始めた。このこと自体が連携に向かう大きな成果であると思う。

○ 保幼小の保育士、教師間で交流活動の事後研修やエピソード研修をもつ中で、互いに子どもの発達の姿を知らないための指導法への誤解があることや、めざす子ども像や理念の方向性が共通であっても具体的な保育や教育のあり方や子ども理解、主体性のとらえ方に微妙なずれがあるのではないかと見えてきた。「主体性」を窓口、このずれの要因を探ることで、互いの子どもの発達や各々の施設のもつ特性への理解や学び、あるいはその学びが各々の保育や教育の見直しや改善につながり、それが子どもの発達や学びをつなぐ基盤になるのではないかとされる。

以下は、保育所と幼稚園それぞれが主体性に関して自分たちの考える姿や援助等を簡単にあげてみたものである。今後、各々のとらえ方について分析し深めることや、ここに小学校教員も入り、ともに互いの共通点、違いをさぐり、主体性を育むための援助や環境について考える手がかりとしたい。

保育所	幼稚園
<ul style="list-style-type: none"> ・ 主体性は好奇心が原点 ・ 安心できる関係づくり(乳児担当制) ・ 見本になる大人を真似たいという気持ちや遊びへの意欲から自発的に動く 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安心、安定が基盤 ・ やってみたいという気持ちをもつ ・ 自分なりにめあてをもって行動すること ・ 友達と協力して一つのものに向かって遊ぶ ・ 認め合える仲間関係 ・ 子どもの思いを実現できる環境、援助

4 来年度の方向性

○ 保育や授業参観、協議の時間を継続して確保することが必要である。そのために交流活動や保育士と教師の協議を各々の年間計画に入れる。交流を継続することで連携に対する教員の意識を高める。

○ 本年度は保幼の交流を主として進めてきたが、今後、小学校1年生の教師も入れた保育士、教師間連携に向けて、三者が組織として連携する意識や構えをもち、それぞれの時間的制約を超えて調整できるよう年間計画作成の際に努力したい。また、他にも交流や連携のできにくい要因がないかを探り、それをクリアーできる方法をともに考える。

京都市錦林保育所（市営保育所）、コドモのイエ幼稚園（私立幼稚園）、京都市立第三錦林小学校

1 研究主題と設定理由

研究主題（仮題）：健やかな子どもの育ちに必要な保・幼・小の相互理解

設定理由：

錦林保育所とコドモのイエ幼稚園は、共に第三錦林小学校区にある。この小学校区においても、少子化、核家族化が進み、かつて子どもたちを見守り育てていた地域のコミュニティの活力の低下も著しい。さらに、各家庭でも、過保護、過干渉や甘やかし、放任といった姿が目立ち、その教育機能が弱体化している現状がある。

そのような状況を背景として、就学に向けて、子どもだけでなく孤立した親も不安を抱え込んでしまい、親子でしんどくなってしまおうという姿も多く見られる。

そのような子育ての現状を少しでも改善するため、「子どもたちを地域の財産と捉え、地域ぐるみで健やかな成長を見守っていこう」との思いから、平成21年3月から第三錦林小学校の校区内において、小学校、保育所、幼稚園、福祉事務所、保健センター、子ども支援センター、児童館、地域の民生児童委員などから構成する第三錦林ネットワークを立ち上げ、まず情報交換からその活動を進めてきた。

今回の研究プロジェクトの実施以前から、この第三錦林ネットワークの活動があったことで、第三錦林小学校を含めた三者の交流がスムーズに立ち上げることができたが、プロジェクトにおける交流の中で、保育所と幼稚園が互いに十分に知り合えていなかったことを実感した。さらに、小学校との三者の交流を通じて、小学校においては就学前の子どもの育ちや保育所、幼稚園での取組が十分に理解できていないのではないかという思い、保育所と幼稚園においては小学校での子どもたちの姿を十分に見通せていないのではないかという思いが高まっていった。

交流によって、連携にとって重要な相互理解の不足を改めて強く感じたことから、現時点の研究テーマを「健やかな子どもの育ちに必要な保・幼・小の相互理解」とした。

2 研究方法とこれまでの取組内容

今年度は、相互に参観と交流保育、さらに小学校での「給食交流」を実施した。

これらの様々な取組は、保育所と幼稚園のメンバーにとっては、互いの生活を知り合う機会となり、小学校のメンバーにとっては、初めて就学前の生活や教育を知る機会となった。また、交流保育は、子どもたちの人間関係を深めていく機会となった。

それぞれの取組においては、子どもへのかかわり方や生活の流れ、考え方などについて、その違いや共通点を明らかにし、さらに、子どもたち一人ひとりについて、取組への参加によって変化の見られた気にかかる子どもへの関わり方などの様子の変化や、コミュニケーション力の向上に繋がる心の成長などを分析してきた。

3 考察

子どもたちにとって、交流保育は、様々な地域から通園している子どもたちが触れ合うことで、人間関係を深めていく第一歩となり、小学校との交流は、同じ小学校へ行く友だちを見つけられたり、入学前に教室や校庭で過ごした経験をもつことで小学校生活への見通しをもつことに繋がり、一つの安心材料になったと考えられる。

また、気にかかる子どもにとっても、入学前に友だちが一人でも増えるということがよりスムーズな小学校生活の開始に繋がると考えられる。

これらの取組の進展につれ、保育所と幼稚園の子どもの姿の違いや共通点が徐々に明確になってきた。小学校入学に向けて、子どもたちの育ちの連続性を尊重するためには、交流計画の中で事前事後の話し合いをしっかりともち、小学校を含めた相互理解と連携が大切であると改めて感じた。

今後は、さらに研究を進める中でテーマを絞り込んでいくことも検討していく。

4 来年度の方向性

相互理解を深めるため、さらに交流を行っていく。その内容については、イベント的に行うのではなく、日常的に自然な形で交流を行っていくよう一年間の計画を作成する。

研究は、交流を基に、お互いに学びを共有しながら、それぞれの独自性を大切にしつつ、小学校までの連続的な育ちを大切にするために共通して大切にすべきことについて、子どもたちの姿に学んでいく。

4 合同研究会

2グループの進捗状況を報告し合い、互いの研究テーマや方法、内容などを参考に、自グループの研究内容を再考し、次年度の研究に生かすことを目的に、平成23年3月3日（木）に合同研究会を行いました。合同研究会には、2グループのメンバーに加え、鯨岡峻座長をはじめとする「こどもみらい館企画推進会議」や「研究・研修部会」の委員の方々にも出席いただき、討議を進めることができました。

鯨岡先生からいただいた協議の柱

2つのグループがお互いの研究内容について議論をしていくことがそれぞれの学びになると感じた。連携では相互理解が大切だが、少しずつ違いが明らかになった時点でその溝を埋めていくものだけにならないようにしっかり議論していただきたい。第三錦林小学校地域と御所南小学校地域の文化や保護者の価値観の違いを考慮して、その違いをどのように考えるかも大切である。また、主体性についても保幼小で考え方が違うということが非常に興味深い。今後、これも主体性ではないだろうかということを考えていくこともよいのではと思う。また、小学校教師の中にも温度差があるのではないかと感じるので、小学校内で受け入れる子どもに対しての議論が必要ではないだろうか。そのようなことも、この研究プロジェクトを通して考えていければと考える。

協議の主な内容

目に見えることだけではなく、子どもの心の育ちに目を向けた研究になるように、これまでの取組を振り返って考えたり、お互いのグループに対する意見などが話し合われました。企画推進会議委員の先生方からも「先を見通した研究するには、この連携を通してやこの連携があったからこそ子どもたちの姿が変わってきたということを今後も聞きたい」「それぞれのよさをいかした連携に」というご意見をいただきました。

Ⅱ. 子育て支援研究プロジェクト

1 目的

保育園(所)・幼稚園を核とした地域の子育て支援のあるべき姿について研究する。

2 研究メンバー

今井みどり	京都市保健福祉局子育て支援部保育課
斉藤真由美	京都教育大学附属幼稚園
阪本 文代	京都市室町乳児保育所
高島伊代子	稲荷保育園
前川 豊子	佛教大学附属幼稚園
向瀬麻由佳	京都市立明德幼稚園
村上 麻里	京都市修学院保育所



取組内容

3 平成23年1月に第1回会合を開催いたしました。会合では初めての顔合わせということもあり各先生方に自己紹介と自園(所)の今現在の子育て支援の状況等を話していただき、お互いを知ることから始めました。また、子育て支援研究プロジェクトで研究してみたい内容・希望等をお一人ずつ発表していただき、その思いをふまえて研究のテーマや方法をこれから探っていく予定です。

第2回会合では、まずはメンバーの中で自園(所)の子育て支援についてどのような形のものがあるのかという資料を持ち寄りました。具体的には、どういう人を対象にどのような取組みを行っているのかということに視点をおきました。各自が“これは支援ではないだろうか”ということ幅広く考えて、そのことについての資料を持ち寄る中から研究テーマに向けて保幼が共通して探っていけるものを見つけていこうと動き出したところです。また、お互いが考える子育て支援とはどのようなものなのかということ幼稚園教育要領と保育所保育指針から考察していくことも大切にしています。

今後毎月1回の会合をもち、今求められる子育て支援、保育園(所)・幼稚園だからこそできる子育て支援について研究を進めていきます。

編集後記

こどもみらい館1階の『元気ランド』が新しく模様替えをしました。

元気ランドには毎日0～5歳の子もたちが遊びに来ていますが、ただ親子で一緒に遊んでもらえば良いと思うのではなく、年齢に合った遊びをじっくり楽しめるように環境について考えてきました。まず0歳についてはハイハイコーナーを広くし、赤ちゃんが安心して遊べる場所になっています。乳児向けのおもちゃでは手先を使った遊びや身体を使った遊びが楽しめるものを置いています。また、コーナー遊びが充実できるようにと積み木コーナーと木の砂場の位置を離し、それぞれの遊びが交じることを解消しました。ままごとコーナーでは模倣遊びができるようにとソフトベビー人形を側に置いています。さらに、幼児の遊びについても再考してきました。例えば、積み木コーナーに木の動物や人形を置くことでイメージを広げて遊べるようにしました。今後は親子で簡単なゲーム遊びができるようにも考えています。

乳児にも幼児にも「元気ランドで遊ぶことが楽しい」と思ってもらえるような工夫をしていますので保育園(所)・幼稚園の保護者の方にもお伝えしたいと思っています。

事業課 事務局

子どもを育む喜びを感じ、
親も育ち学べる取組を進めます。
(「子どもを共に育む
京都市民憲章」より)



発行日 平成23年3月15日
 発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
 〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る
 Tel (075)254-5001 Fax(075)212-9909
 URL http://www.kodonomirai.or.jp